

附 言

鍋 田 一

— 附 言 —

古稀の齡を越えられてなお、余人の追隨を許さぬ研究活動が続けておられる先生について語ることとはとうてい私のなし得るところではない。しかし私たちには、先生が還暦および古稀の寿を迎えられた際に、受業生の懇請を容れられて、ご自身が歴史家としての厳正さをもって述べられた『回想』と『七十自述』とが与えられているので、一切の贅言を必要としない幸いに恵まれている。にもかかわらず、先生の『退休記念論文集』が刊行されるにあたって、附言を草するにいたったことは全くの矛盾であるが、永年先生の醫咳に接したものの一人として、あえて半解の蕪辭を申し述べるものであることをとくにお許しいただきたい。

先生は昭和二三（一九四八）年、明治大学法学部に迎えられて以来、四〇年にわたる歲月を法史学講座の確立に、ひいては法史学そのものの確立に力を尽してこられ、かつそれを達成せられたが、現在の印象をもって申せば、毅然として聳えたつ巨樹の趣きと形容することができよう。先生は、モンゴリア高原に住んだ遊牧民の法の究明を終生の課題として研究活動が続けてこられたが、その経緯をもってすると法律学者と呼ぶのがふさわしいようにも思われる。しかし私は、先生の本領は法律学者であるよりも前に歴史学者であること、天成の歴史家と目することがふさわしいと考えている。高名な裁判官であり碩学であられた尊父の薫育のもとに成長されながら法曹の道を歩まれず、みずから「ずいぶん小さいころから、史癖をもっていた」（『回想』）と述べておられるように、また旧制高校時代にモ

ンゴリア草原に立たれて、独自のモンゴル人の歴史的、世界的世界を想起されているように、歴史を専攻する途を当然のように進まれたところに、その微を見いだすことができるのである。

先生は、十世紀のキタイ法の究明から研究活動に入られた。「執拗」な努力が重ねられたにもかかわらず、史料の制約から一旦キタイ法の究明を中断されるが、現存史料による復原を極限まで達成せられていることや、史料に対する読みの深さのなかに、歴史家としての骨頂が遺憾なく発揮されている。

ついで一三世紀以降のモンゴル法の究明に転じられた先生は、モンゴル人の法が決してかれらの独創物ではなく、有史以来モンゴリア高原に住んだ遊牧民がその生活にもとづいて産みだした文化的所産であることを明らかにされるとともに、「北方ユーラシア法系」の存在を確認されるにいたった。しかしそこにもなお史料の限界を見とられた先生は、さらに清朝の「蒙古例」の研究を遂行することを通じて、遊牧民の法より具体的な究明を試みられたのである。

清朝の「蒙古例」を含むモンゴル法典の逐条的考察は先生の研究をもって嚆矢とするが、卑近な表現を用いるならばそれは気の遠くなるような壮大な作業であった。その準備としてのテキストの周到な採訪・徹底した校合・厳密な考証は、後人がその種の作業を要しないであろうと自認されるほどの周密なものである。先生はつねづね「実証の職人」であることを自負しておられるが、それこそは歴史家の謂の第一に値いするものではあるまいか。

おそらく先生は驚愕せられるであろうが、いま一つ触れておきたいことは、物、具体的なものに対する先生の眼力の確かさである。先生は北京留学中からしばしば考古学的な発掘調査に参加され、昭和一八（一九四三）年にはみずから祖州城の発掘調査を主宰しておられるが、その非凡な眼はかならずしもこの時期に涵養せられたものではなく、生得の素質と称してよいものであろう。物に対する確かな眼をもつことを私は歴史家の必須の条件の一つと考えているが、まさにその意味においても先生を歴史家と呼ぶのがふさわしいと思うのである。